

Glocal Tenri



9

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.9 September 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
お供えと献金
／永尾教昭 1
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (42)
「おさしづ」第5巻における個人の身上・事情と「道」
／澤井治郎 2
- ・ 日本語教育と海外伝道 (26)
歴史の中の留学生⑤
／大内泰夫 3
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (24)
和辻哲郎—キルケゴールの“卒業生”
／金子 昭 4
- ・ 宗教伝統における聖典の意味構造 (2)
「語られる聖典」とその伝承
／澤井義次 5
- ・ 遺跡からのメッセージ (61)
唐古・鍵遺跡の外來系土器から見えるもの
／桑原久男 6
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (35)
ヨンビ=オバンゴ4代大統領の軌跡①
／森 洋明 7
- ・ イスラームから見た世界 (5)
天理教とイスラームの出会い③
／澤井 真 8
- ・ 現代宗教と女性 (29)
魔女狩りと資本主義
／金子珠理 9
- ・ ニューヨーク通信 (6)
コロナ禍中のたすけ合い
／福井陽一 10
- ・ 図書紹介 (119)
『ハワイ日系人の強制収容史—太平洋戦争と抑留所の変遷』
／尾上貴行 11
- ・ 2020 年度公開教学講座の案内 12

巻頭言

お供えと献金

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

通常、日本人は神仏に詣でるとき賽銭、すなわち金銭のお供えをする。そしてそれらは、どの宗教であろうと個々の社寺や教団の会計の中に入り、それが聖職者の人件費や教団の運営費などになっていくことは間違いない。現実はそのようであったとしても、恐らくほとんどの日本人は神仏に金銭を供えることによって無病息災や商売繁盛などが守護されると思ってやっている。結果は同じでも、意識として教団への献金ではなく、神に供えるという点であり、天理教でもそのように説く。筆者は過去、神への金銭のお供え(天理教では「理立て」「つくし」とも言う)に関する天理教の教義上の根拠を調べたが、明白に説かれているものはなかった。しかし、これは一つの大事な信仰的行為であると思う。本来は、このように取り立てて信者に説明しなくても、いわば習慣のように神に詣でるときは金銭を供えるようになったほうがいいと思う。筆者自身、天理教の教会に生まれ育ち、お供えをせよと多少は親から言われたが、どちらかと言えば、むしろ当然するものと思って今までも現在もしている。しかし、欧米人がこれを理解するだろうか。実際、ある熱心な欧米人の天理教信者が「神様にお供えするというと、嘘っぽく聞こえる」と述べた。確かに神が衣服を買ったり、レジャーに行くわけではない。つまり、彼は神前に供えられた金銭は教団の運営のために使われるのだから、はっきりそう言った方がよいと言うのである。現実を直視している欧米人と、現実を知っていながらも、俗っぽいことをあらわにせず、神聖なままにしておきたい日本人との違いということになるだろうか。昨今は必ずしもそうではないかも知れないが、自分が供えたものがどう使われるかあまり深く探求しない日本人の性格もあるだろう。だからだろうか、総体的に欧米人の教会への献金は、日本人のお供えに比べてかなり額が低い(もちろん聖書の記述通り収入の十

分の一を献金している人もいだろうが)。一方で、例えばイギリスの Charity Aid Foundation が発表する「世界寄付指数 (World Giving Index) 2018 年版」によると、日本は世界で 99 位と先進国の中では著しく低い。このスコアは国民の慈善団体への寄付の額ではなく、過去 1 ヶ月に寄付をした人の割合であるが、確かに欧米に比べて日本は寄付文化が定着していない。2004 年 12 月に起きたスマトラ島沖の大震災では、約 24 万人が津波などで亡くなった。その際、フランス赤十字が集めた義捐金は当時のレートで約 174 億円と、日本赤十字の 2 倍弱であった⁽¹⁾。フランスの人口が日本の約半分であることを考慮すると、フランス人は一人平均日本人の約 4 倍寄付をしたという理屈になる。では、日本人は救援活動に対して冷淡なのか。そうではないと思う。この開きは、災いに対する考え方の違いに由来するのではないか。ヨーロッパ諸国の場合、日本に比べて天災は極端に少ない。多くの国家的災いは、隣国との戦争や異民族の侵入、つまり人災である。人災から逃れるには人間相互の助け合いによるのであり、従って義捐金などへの意識が高くなったのではない。逆に、異民族による支配を経験したことがない日本人にとって、災いとは地震、火山の噴火、台風といった天災である。それらを防ぐには神仏にたよるしかない。だから、神仏に詣でれば多額の金銭を供えたのだろう。いずれにしても、海外布教を継続的に進めるには、当然各国で経済的な自主独立をしていかねばならない。そのためには、「神へのお供え」と必ずしも正攻法で説かず、「布教拠点への献金」である、といささか趣きを変えて説いていっても良いのではないかと思う。

[註]
(1) 永尾教昭『在欧 25 年』、天理大学おやさと研究所、2014 年。